БОЛОВСРОЛ, СОЁЛ, ШИНЖЛЭХ УХААН, СПОРТЫН ЯАМ

ХӨДӨЛМӨР, НИЙГМИЙН ХАМГААЛЛЫН ЯАМ

モンゴル国障害児のための教育改善プロジェクト

2017年12月

第3号

すべてのこどもたちがニーズに合った発達支援や教育を受けられるように…



目次：

プロジェクトの紹介	1
プロジェクト対象地域	1
プロジェクト事務所	1
子どもの健やかな成長を支えるために	2
1歳6か月児健康診査の試行～早期からの支援につなげるために～	2
親子教室の試行～親子に寄りそう支援を目指して～	2
一人でも多くの子どもに教育の機会を～フブスグル県での就学促進の試み～	3
ミニ･プロジェクト（第1回）の取り組み	4
みんなが一緒に学ぶことの大切さ	4

プロジェクト事務所

〇教育・文化・科学・スポーツ省（教育省）：
政府庁舎 3号館　212号室
電話：976-9424-0702

〇労働・社会保障省（社会保障省）：
リハビリテーション・研修・職業センター　209号室
電話：976-8634-0702

〇メール：jica15start@gmail.com

〇プロジェクトウェブサイト：
http://www.jica.go.jp/project/mongolia/013/index.html

〇Facebook：https://www.facebook.com/jicastart/

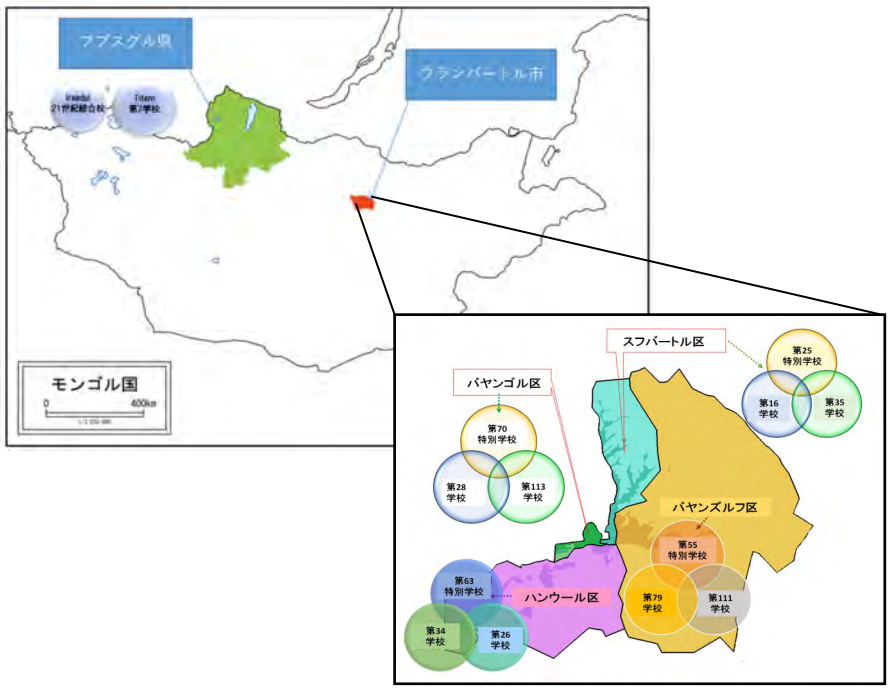
プロジェクトの紹介

教育・文化・科学・スポーツ省（以下、教育省）と労働・社会保障省（以下、社会保障省）及びJICAは、2015年8月から「障害児のための教育改善プロジェクト」を実施しています。障害の早期発見、子どもたちに対する発達支援や教育のモデルを構築すること（プロジェクト目標）を通して、障害のあるすべての子どもが、ニーズに合った発達支援・教育サービスを受けられるようにすること（上位目標）を目指しています。

4年間のプロジェクトも、いよいよ折り返し地点に来ました。後半戦では、障害のある子どもの発達支援体制づくり、インクルーシブ教育推進に重点を置きます。具体的には、母子健康手帳の活用促進と1歳6か月児健康診査の試行、親子教室やポーテージ早期教育プログラムを通じた子ども・家族支援、田中ビネー知能検査Vのモンゴル版開発支援、そして、通常学校における合理的配慮や障害のある子どもたちの就学の促進、学力評価のあり方の検討に取り組んでいきます。

プロジェクト対象地域

パイロット地域として、ウランバートル市からはバヤンゴル区を、地方からはフブスグル県を選定し活動しています。また、ウランバートル市にある知的障害・肢体不自由特別学校4校とそれらの周辺にある通常学校8校及びフブスグル県の通常学校2校をパイロット校としました。



子どもの健やかな成長を支えるために

プロジェクトでは、障害や発達の遅れのある子どもの健やかな成長を支えるために、関係者・関係機関の能力強化に取り組んでいます。パイロット地域であるバヤンゴル区とフブスグル県における「母子健康手帳の活用促進」、「1歳6か月児健康診査とそのフォローアップ活動としての親子教室の試行」、「アセスメントツールの改善」、「ケース・ワークショップの実施」を通じて、障害のある子どもの発達支援体制のモデルづくりを行っています。そしてその実践結果を「オペレーション・マニュアル」にまとめていきます。今回はバヤンゴル区における1歳６か月児健康診査と親子教室について紹介します。

1歳６か月児健康診査の試行～早期からの支援につなげるために～

モンゴルでは、家庭病院で母子健康手帳を用いた健康診断や予防接種は行われていますが、定期健康診査は導入されていません。乳幼児期における定期健康診査を、発達の遅れや障害のある子どもの発達支援につなげている日本の実践事例を参考に、バヤンゴル区にて1歳6か月児健康診査の試行を始めました。早期からの発達支援は、2次障害を防いだり、生活に必要な能力を育んだりするために大変重要です。1歳6か月児健康診査は、保護者や関係者が、子どもの発達の遅れに早期に気づくことにより、その子どもにとって必要な支援につなげることを目指しています。

試行を始めるにあたり、バヤンゴル区保健センターと協議を重ね、健康診査で使用する問診票案を作成しました。その後、健康診査を実施する同区の家庭医109名を対象に研修を行うとともに、問診票案を見直しました。

2017年5月8日～12日、モンゴルで初の1歳６か月児健康診査が実施されました。5日間で、対象児の86.3%にあたる377人が受診しました。6月以降も、毎月第４週に継続して健康診査が実施されています。

今後、試行を通じて実施方法や内容の充実を図っていきます。健康診査をきっかけとして、子どもの健康や子育てに関し不安を抱える保護者が、安心して育児ができるような取り組みを行っていきます。



親子教室の試行～親子に寄りそう支援を目指して～

健康診査の試行を通じて、支援が必要な子どもに対し、医療機関への照会だけではなく、就学前教育（幼稚園など）、そして小学校就学までの「つなぎの支援」の必要性が見えてきました。

日本の自治体では「つなぎの支援」として、我が子の発達に不安を抱える保護者の相談に応じ、子どもの発達に必要な関わり方を学んでもらうことを目的に「親子教室」を実施しています。

その実践例に倣い、2017年10月からバヤンゴル区にて「親子教室」の試行を始めました。5月から8月の健康診査で相談や支援が必要と判断した親子を対象に、月に1回（半日）、5回セットで実施します。会場は第８ホロー役所の会議室を使用し、指導者として区役所に所属する心理士とソーシャルワーカーの2名が任命されました。また、第10、第186特別幼稚園教員にも支援いただくことになりました。

10月の親子教室には、計10組の親子が参加しました。プログラムの内容は、親子遊びが中心で、乳幼児期に大切と言われる「人とふれあい関わること」「いろいろな感覚を感じること」を経験できるよう工夫しています。一番人気だったのは、新聞バルーンです。指導者たちが、新聞紙をつなぎ合わせた大きなバルーン（写真）を子どもたちに近づいたり離したりすると、子どもは風を感じます。かさかさ、びりびりという音を聞きます。子どもたちはいきいきとバルーンの動き見つめていました。

親子に寄りそう支援を提供し、子どもの健やかな発達を支え、次のステップへとつないでいく。そんな重要な役割を親子教室は担っています。11月以降も毎月実施していきます。



障害のある子どもたちの教育の改善を目指す活動

一人でも多くの子どもに教育の機会を～フブスグル県での就学促進の試み～

一人ひとりの発達段階に応じた目標や指導方法を考えることをパイロット校教員と一緒に試行し、個別教育計画を活用した指導の有効性の検証と普及に取り組んできました。

一方で、様々な理由により学校に通えていない子どもがいます。特に障害の重い子どもにとって、学校に通うことは登下校の送迎、学校での過ごし方、トイレや食事の介助など、解決しなければならない課題が多く、結局は家庭で過ごしたり、就学年齢を過ぎてもNGOが運営するデイケアセンターに通ったりしている子どもも少なくありません。また、特別学校がなく、特別学級もほとんどない地方部では、通常学校での障害児の受け入れ体制を整える必要があります。すべての子どもが地域の学校に通うようにする第一歩として、パイロット県であるフブスグル県において学校に通えていない子どもの就学支援活動を開始しました。

フブスグル県の2つのパイロット校と教育文化芸術局の担当者と協力し、学齢期にも関わらず就学できていない子どものリストを作成し、家庭を訪問し、学校に通えていない理由を尋ねました。理由は家庭によって様々で「一人でトイレに行くことができない」や「寝たきりで動かすことができない」等の回答がありました。

各パイロット校で１名ずつを対象に、就学につなげるための会議を開くことにしました。会議には、対象児とその保護者、学校で障害のある子どもをサポートする教員、「障害児の保健・教育・社会保障支部委員会」の教育担当者、障害児の親の会職員などが集まりました。そして、対象児や保護者の願いを聞き取り、その子どもの就学に必要となる通学の支援や学校での学習形態、学習内容などを一緒に考えました。

各校には、特別な教育ニーズのある子どもが授業の前後に補習を受けたり、障害特性に応じた支援を受けられる「子ども発達支援センター」と呼ばれる場所があります。今回対象となった２人は、最初のステップとしてまず、このセンターに通うことになりました。少しずつ、音楽の授業などで、通常学級の子どもたちと一緒に授業を受ける機会も増やしていきます。今後は、継続して通学できるよう、保護者と学校が連携していく必要があります。また、計画した支援が実施できているかどうか、モニタリングをしていくことも重要です。



就学促進のための記入シート(例)

記入日	2017年9月6日
子どもの名前	B. Ganbaatar
年齢	14
性別	☑男　　□女
就学支援委員会参加者名	対象児父親、対象児、教育局生涯教育担当、保護者会XXセンター教員、XXソム生涯学習センター教員、XX学校教員、XX学校子ども発達支援センター教員、XX学校校医、XX学校SW、プロジェクトチーム

現在の在籍園・センター・校	なし（在宅）	希望する学校	XX学校の子ども発達支援センター
診断名（診断時期/診断機関）	ダウン症（2003年12月18日 / ウランバートルの神経科の医師）		
本人の願い	感情を上手に表すことができないのでわからない。		
保護者の願い	XX学校の子ども発達支援センターに通ってほしい。 自分の気持ちを表すことができるようにしてほしい。		
その場で観察された特徴	・ 社会性が乏しい。 ・ 人と接するのがいいのではないか。 ・ 目があまり見えていないかもしれない。 ・ 筋肉が弱いのではないか。 ・ 保護者がいつも支援しているので、筋力が弱い。 ・ いつも口を開いている。		

学校生活以外で必要な支援	領域	支援内容	担当者
	医療	月1回ほど、針治療などの治療を受ける。	学校医
	福祉	社会福祉の手当てを申請する。	教育局
	リハビリ・療育	歩行訓練、バランスの取り方の練習をさせる。 筋肉をつかう練習をする。(体を鍛える)	体育の教員 学校医
特記事項・出席者からの助言等	特になし		

就学のために必要な支援	領域	望ましい支援（学校）	望ましい支援（家庭）	担当者
	通学	通学する度に、本児に分かりやすい形で褒める。	毎回時間通りに送り迎えする。	センターの教員 親
	生活全般	セーターを着る計画を立てる。 ポーテージを活用する。	着替えは、絵カードを用いて手伝う。 教員から出されたポーテージの課題に取り組む。	センターの教員 親
	学習	丸三角四角の型はめをする。(型から出す、はめる)	家で同じ課題をする。	センターの教員 親

● 決定事項

学びの場	第1	第2	第3
場所（学校名・クラス名）	XX発達支援センター	XX学校 1a 音楽	音楽の個別指導 XX 発達支援センターに同校の音楽教員が指導に来る。
頻度	週2回	月1回 センターの先生と一緒に参加する。	月1回
時間	2時間	1時間	30分

次のアクション		
	学校	個別教育計画（IEP）を作成する。
	教育局	実態把握と発達のアセスメントをしたい。
	家庭	子どもを褒める（認める）。宿題を手伝う。

保護者氏名 D.Batchimeg	教育局担当者氏名 D.Nyamsuren
サイン	サイン

会議で使用した記入シートの例

ミニ･プロジェクト（第1回）の取り組み

プロジェクトでは、子どもたちの特別な教育ニーズに合った様々な教育形態の効果を検証し、全国に普及し得るモデルを開発することを目的に、小規模なパイロット活動（ミニ・プロジェクト）を実施しています。

2016年6月から2017年5月まで、3件のミニ･プロジェクトを実施しました。

「障害児のための児童預かりサービス強化プロジェクト」

実施団体	子ども発達情報UCHRALセンター
プロジェクト概要	児童預かりサービスは、2~5歳の子どものための日中の預かり保育制度である。所定の研修を受けた個人やNGOが、家庭や団体の施設で近隣の子どもたちを預かることができる。このサービスでは障害児も受け入れ可能となっているものの、現在の研修内容には障害児に対する接し方や指導法などが十分に含まれていない。そこで子ども発達情報UCHRALセンターはミニプロジェクトを通じ、障害児を預かる際に必要な知識や技術に関する研修モジュールを開発し、プロジェクト対象地域で研修を実施した。

「私たちは学べる」（生涯学習センターでの障害児受け入れプロジェクト）

実施団体	オルホン県生涯学習センター
プロジェクト概要	学校をドロップアウトした子どもや成人を受け入れている公立の生涯学習センターにおいて、学校に通えていない障害児を対象にノンフォーマル教育を行った。センターに通えない子どもには訪問教育も実施した。

「知的障害のある子どもたちのインクルーシブ教育プロジェクト」

実施団体	モンゴルダウン症協会
プロジェクト概要	ウランバートル市ハンウール区にある公立小学校、第130学校に学齢期のダウン症の子どもたちが通えるようパイロット学級を開設した。同校の教員の協力を得て、パイロット学級の子どもたちが通常学級の子どもたちと一緒に体育、音楽、美術などの授業を受けられる体制を整えた。

みんなが一緒に学ぶことの大切さ

モンゴルダウン症協会の「知的障害のある子どもたちのインクルーシブ教育プロジェクト」は、ハンウール区第130学校と協力してダウン症の子どもたちを対象としたパイロット学級を開設しました。現在、10人の子どもたちがその学級を利用しています。これらの子どもたちは身辺自立のための活動、算数や国語の授業はパイロット学級で受けていますが、体育や音楽は第130学校の3・4・5年生のクラスに参加しています。授業だけでなく、文化祭やスポーツ大会にも通常学級の子どもたちと一緒に参加しました。

当初、通常学級の子どもたちは、外見に特徴のあるダウン症の子どもたちを好奇の目でることもありました。けれど一緒に活動するなかで、次第に、パイロット学級の子どもたちが授業中わからないところを教えたり、手をつないで学級と学級の間を送り迎えしたりするようになりました。

ミニ・プロジェクトでは、第130学校の教員向けにダウン症の理解を促進するのための研修会を開催しました。教員たちの理解が深まるにつれ、授業や課外活動でもより協力してくれるようになりました。

プロジェクトの後半では、保護者向けの研修も実施しました。保護者の中には、「なぜ私の子どもがダウン症の子どもと一緒に学ばなければならないのですか」と発言する人もいましたが、研修会への参加を通して、ダウン症の子どもたちのこと、インクルーシブ教育の重要性について理解が深まり、保護者の態度も協力的なものに変わってきました。

2017年9月の新学期には、パイロット学級が第63特別学校の分教室として、正式にハンウール区に登録されました。







